主日の福音 2025/1/5(No.1334)

主の公現(マタイ 2:1-12)

贈り物は、人を生かす王に出会ったしるし

御公現の祝日を迎えました。占星術の学者たちがイエスを伏し拝み、贈り物を献げます。馬小屋に、三人の博士の御像を収めました。それまで、離れたところに置いていたのは、「東方で星を見て、はるばる拝みに来た」ということを感じさせるためです。

さてこの占星術の学者たちは、権力を振りかざすこの世の王であるヘロデに、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」（2・2）と尋ねています。あらためて、「ユダヤ人の王」が何を意味しているのか確認しましょう。

マタイ福音書の 27 章 11 節で総督ピラトが「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問する場面があります。また十字架にかけられた場面、マタイ 27 章 37 節でイエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きが掲げられました。

すると、福音記者マタイにとって「ユダヤ人の王」とは、十字架につけられるイエスを表すことになります。イエスは、ヘロデのような王なのではなく、罪から人を救うために十字架に向かって歩む「王」なのです。ここまで考えると、「ユダヤ人の王」という称号を、福音記者マタイが占星術の学者に言わせたのかも知れません。

ユダヤに住んでいるヘロデ王は自分が生き残るためなら何でもする残忍な王ですが、「ユダヤ人の王」イエスは罪から人を救うために十字架に向かい、人を生かす王です。占星術の学者たちは両方の王に会いました。そして、人を生かす王イエスにひれ伏し、黄金・乳香・没薬を贈り物として献げたのです。二人の王のうち、イエスをまことの王として選んだのです。

占星術の学者たちは私たちにも、選択を迫っています。「わたしも行って拝もう」と言うだけで、イエスを自分の中から追い出して暮らすのか、それとも「別の道を通って」（2・12）自分たちの国へ帰って行った学者たちのように、心の中に救い主を受け入れて、イエスの照らし、導きを信じて生活するよう心がけるのか、今問われています。

馬小屋は片付けられて、クリスマス気分も終わることでしょう。しかし私たちには、「ユダヤ人の王」としてお生まれになった方、つまり人を罪から救うために十字架に向かって歩むお方に見倣って生きることが求められています。教会に集まるたびに、宝の箱を開けて贈り物を献げ、今週もあなたの生き方に倣って生きますとお約束してそれぞれの場所に帰る必要があります。

これは多くの人の生きる道からすれば、「別の道を通って」生きることかも知れません。それでも、選んだ生き方が正しいと信じるなら、この道を全うしていきましょう。自分の十字架を背負って、まことの王であるイエスが歩む道を共に歩みましょう。この道を生きると決めたその時から私たちには、目で見る馬小屋は必要なくなります。

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)